

白鳥の再飛来率について

村 瀬 正 夫

白鳥の再飛来率とひと口に云っても厳密には簡単ではなく、調査対象となる白鳥群はすべて個体識別が出来ていることが前提となることや、毎日全数観察出来る立地条件が必要とされるからである。特定個体についての渡来、再飛来の報告はしばしば眼に入るが、特定集団を対象に渡来、再渡来を継続的に調査した報告は、標識鳥を対象に選んだ加藤喜七氏のもの諏訪湖のコハクチョウで「スワオ」、「スワコ」のつがいを中心とした家族群に関する林俊夫氏のもの、およびアメリカコハクチョウの「クロチャン」とコハクチョウの「カアサン」との亜種同志のつがいを中心とした一族に関する筆者らの報告が目される。しかしそれらの調査には夫々に特色があり、加藤氏のケースでは標識鳥の経年観察回数と越冬時の移動状況などに興味を持たれ、林氏のケースでは主として嘴峰パターンによるコハクチョウの個体識別を、筆者らは嘴峰黄色斑の大きさがかなり異なるアメリカコハクチョウとコハクチョウとのつがいの子の亜種間交雑個体の黄色斑の形は一体どうなるのかが興味を中心となった。このような状況下で筆者らの調査が進むうちに、「クロチャン」一族は「クロチャン」の子（第1交代配種）および孫（第2交代配種）がどんどん数を増し、前者は31羽、後者は20羽となったので、両親、子および孫の「クロチャン」一族三世代に限った再飛来率について調べたので報告する。

まず両親の「クロチャン」と「カアサン」とがペア行動に入ったのが確認されたのは1986年10月23日の北上市相去町の新堤に飛来したのが最初で、その後は1996年10月23日同じ新堤へ連続11回のペア渡来中である。この2羽は10回も連続で再飛来しているので、当然再飛来率は100%ということになる。

次に「クロチャン」と「カアサン」とのつがい同行飛来した幼鳥達（第1交代配種）についてみる。このつがいは1987年の秋に2羽、1988年に4羽、1989年が1羽で、1990年は3羽、1991年には4羽、1992年が5羽で、1993年も5羽、次の1994年は0、そして1995年には又5羽、1996年は2羽で、現在迄で31羽の幼鳥を同行飛来している。これら第1交代配種幼鳥の再飛来状況を見ると大概の幼鳥は翌年再飛来するが、まれに翌年をパスして翌々年再飛来するものが観察されたが、「クロチャン」一族の幼鳥達に限っては幼鳥が最初の飛来から2年間パスして3年目に再飛来した例はなかった。

表1にそれら飛来状況を年次毎に記載した。夫々の年次毎の再飛来率を見ると、1987年の2羽の幼鳥のうち再飛来したものは1羽で、再飛来率は50%、1988年の4羽の幼鳥で再飛来したのは3羽で75%、1989年の1羽は1羽再飛来100%、1990年の3羽も3羽再飛来で100%、1991年の4羽も4羽とも再飛来しており100%であった。1992年の5羽は4羽再飛来で80%、1993年の5羽は2羽が再飛来で40%と低いのが、この年他の1羽の幼鳥の再飛来が別の地域で確認されているので実質再飛来が観察されたのは60%、1995年の5羽は現在までに再飛来したのは3羽で60%で、従って1995年までに飛来した29羽の幼鳥のうち、北上に再飛来したと確認されたのは21羽となり、再飛来率は72%強となった。

表1. 北上の「クロチャン」一族 (1997)

	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	備 考
クロチャン 1)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	} つがい〔両親〕
カアサン 2)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
小 計	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
ブ イマ 3)			○											アメコとのつがい
ヤ ジサ 3)			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
オ ニサ 3)				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	アメコとのつがい
キ ボツ 3)				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ナ ガレ 3)				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	アメコとのつがい
ゲ ニイ 3)				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
マ チュ 3)						○	○	○	○	○	○	○	○	} つがい
ピ ンキ 3)						○	○	○	○	○	○	○	○	
エ キキ 3)							○	○	○	○	○	○	○	} つがい
チ ャコ 3)							○	○	○	○	○	○	○	
ス ー 3)								○	○	○	○	○	○	(山階鳥研) コハクとのつがい
ヒ ラリ 3)								○	○	○	○	○	○	
ゴ マチ 3)									○	○	○	○	○	(山階鳥研)
ユ ルダ 3)									○	○	○	○	○	
イ ビッ 3)										○	○	○	○	
ハ ブラ 3)											○	○	○	(第1代交配種)
シ デク 3)												○	○	
ミ ロヒ 3)													○	
サ ム 3)													○	
小 計			2	5	5	7	11	11	16	9	11	13		
コ ロイ 3)									○	○	○	○	○	(第2代交配種)
ア ナオ 3)									○	○	○	○	○	
ム ーミ 3)										○	○	○	○	
ト ッポ 3)											○	○	○	
ヤ ビイ 3)												○	○	
ア ンヨ 3)													○	
ラ ンボ 3)													○	
ウ ラ 3)													○	
ゾ シイ 3)													○	
モ ック 3)													○	
ヒ バル 3)													○	
メ ーグ 3)													○	
ホ ーリ 3)													○	
ノ ッポ 3)													○	
ム ッチャン 3)													○	
小 計									3	6	7	10	16	
合 計	2	2	4	7	7	9	13	16	24	18	23	31		
(註)	1) アメコ 2) コハク 3) アメコ×コハク 4) (アメコ×コハク)×アメコ 5) (アメコ×コハク)×コハク 6) (アメコ×コハク)×(アメコ×コハク)													

ついで「クロチャン」の子供のうち、つがいを形成して幼鳥を同伴、すなわち「クロチャン」の孫に当る幼鳥の再飛来率を見る。まず1992年の秋、「クロチャン」の1988年の子の「ナガレ(♂)」がアメリカコハクチョウとつがいになり、3羽の幼鳥を連れて飛来した。翌1993年、「クロチャン」の1990年の子「ニイチャン(♀)」がⅢ型コハクチョウとつがいになり、この組も3羽の幼鳥を同行し、さらに翌1994年には「クロチャン」の1987年の子「ヤマ(♂)」がアメリカコハクチョウとのつがいで2羽の幼鳥を同行。翌1995年には「クロチャン」の、1990年の子の「ピンキー(♂)」と「マユ(♀)」との兄弟がつがいになり、2羽の幼鳥を同行し、同年、「クロチャン」の1991年の子「スージー(♂)」がⅡ型コハクチョウとつがいになり、3羽の幼鳥を同行した。翌1996年には「ピンキー」組と「スージー」組とが連続で子連れ飛来し、加えて「クロチャン」の1991年の子「エル(♂)」と「キキ(♀)」の兄弟がつがいの子連れで飛来、この3組の幼鳥が夫々1羽、4羽、2羽であったので、現在までに飛来した「クロチャン」の孫は全部で20羽となった。そこで孫幼鳥の再飛来を見ると、1992年生れの幼鳥は3羽のうち3羽共再飛来し再飛来率は100%、1993年生れの3羽も3羽共再飛来して100%。1994年生まれの2羽は1羽しか再飛来せず、50%。そして1995年生れの5羽は5羽共再飛来しており、再飛来率は100%であった。従って1995年まで孫幼鳥は13羽中の12羽が再飛来しており、再飛来率は92%強と高率であった。

結果として「クロチャン」一族で見る限り、昨シーズンまでの飛来分を今シーズンまでの再飛来で計算すると、親は2羽中の2羽、子は29羽中の21羽、孫は13羽中の12羽で、合計44羽中の35羽が再飛来を果しており、再飛来率はほぼ80%となった。

このような形での再飛来率の調査には必ずしも明快な意味はないかも知れないが、表2に示すように、アメリカコハクチョウに見られる黒い嘴峰パターンを持つ白鳥が、近年北上市周辺では増加傾向にあり、この5年程は20羽を越え、今シーズンはついに30羽を越えた。その増加内容は決してアメリカコハクチョウの数の増加によるのではなく、「クロチャン」一族に見られる第1交代配種および第2交代配種の数の増加と高い再飛来率によるものと結論された。

表2. 北上に飛来した黒い嘴峰を持つハクチョウの数

The number of wintering swans with the black bill pattern in Kitakami

	アメリカコハクチョウ C. c. columbianus		アメコ×コハク雑種 Hybird between C. c. columbianus & C. c. bewickii		ナキハクチョウ C. c. baccinator	合 計 Total
	成 鳥 adult	幼 鳥 juvenile	成 鳥 adult	幼 鳥 juvenile	成 鳥 adult	
1985/86	3	2				5
1986/87	2					2
1987/88	1			2		3
1988/89	2		1	4		7
1989/90	1		5	1		7
1990/91	2		5	3		10
1991/92	3		8	4	1	16
1992/93	4		9	8	1	22
1993/94	5		16	8		29
1994/95	3		17	2		22
1995/96	4	1	12	10		27
1996/97	3		22	9		34